



教皇様の聲

8

256号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2001

聖霊の神殿、マリア

〔聖霊と聖母の関係についての教皇様のお話。〕

「マリアは出かけて、急いで山里へ向かい ...」（ルカ1・39）

（…）ご一緒におとめマリアの訪問の玄義を思い返しましょう。（…）福音記者ルカの言葉が心にこたえます。「マリアの挨拶をエリザベトが聞いたとき ... エリザベトは聖霊に満たされました。（1・41）

マリアとそのいとこのエリザベトとの出会いは、ちょっとした「聖霊降臨」のように思えます。（…）

聖書には、マリアの訪問はお告げの後すぐに行われたと書かれてあります。聖霊によってその胎内に御子を宿していたマリアは、恩恵と霊的喜びで輝いていました。マリアに聖霊が現存していたのです。エリザベトの息子ヨハネは、神の御子の道を整えるよう運命づけられていましたが、マリアの訪問を受けると喜びおどります。

マリアがいるところにはいつもキリストがいます。そしてキリストがいるところには聖霊がいま

す。聖霊は御父と御子から出ますが、それは三位一体の生命の最も神聖な神秘です。使徒言行録は、高間でマリアが熱心に祈る様子を当然ながら強調しています。高間には使徒たちも集まり、「天からの力」を受けるために待っていました。おとめマリアの「フィアット（なりますように）」という返事によって、お告げの時そして聖霊降臨で、神の賜物が人類にもたらされたのでした。教会の旅路の中で聖霊降臨は今でも続いています。

マリアとともに祈りに集い全教会にあふれんばかりの聖霊が注がれるよう心から願いましょう。そうすれば、マリアは帆を広げ新しい千年期の沖に漕ぎ出すことでしょう。聖座に仕える人々に聖霊が降り、その仕事が信仰と使徒職の熱意によって活気づけられるよう特に求めましょう。（…）

ここに集まった皆さんに（…）マリア訪問の恵みがいつまでも続くよう願っています。（2001.5.31）

聖体におられるキリスト

〔キリストの聖体の祝日にラテラン教会前の広場でミサが行われた。教皇様は、

「ご聖体は世界を刷新するというキリスト者の使命のためになくてはならないもの」とお話しになった。〕

1 「天使のパンを見よ、受け継がれる巡礼者の食物、真の継承者の子らのパンである。」（続唱）

今日教会は世界にキリストの御体を示し、キリストを崇めるよう招きます。キリストを礼拝しましょう。神を信じる者は、キリストがご自身を残された秘跡に焦点を当て注目します。キリストはご自分の御体、御血、ご靈魂、神性をご聖体に残されました。これこそ、ご聖体を最も聖なる現実とみなす理由です。「聖体」はあがないの犠牲の記念なのです。

キリストの聖体の祝日に、私たちは「聖木曜日」に立ち戻ります。その日救い主は、弟子たちと最後の過ぎ越しを祝われました。ユダヤの過ぎ越しの夕食を完成させ、ご聖体の式を始められたのがこの最後の晩餐でした。教会が何世紀もの間、木曜日をキリストの聖体の祝日のために選んでいるのはこのためです。この日は礼拝、黙想、称賛の祝日です。こ

の祝日に神の民は、キリストが残された最も貴重な宝、キリストが現存する秘跡に近づき、ご聖体を称賛し、祝い、町中を行列して運びます。

教会は、貴重な宝、

あがないの犠牲を永遠に記念する聖体を崇める

2 「シオンよほめたたえよ、あなたの救い主を。」（続唱）

霊的なエルサレムである新しいシオンに各国から様々な言語・文化の神の子供たちが集まります。シオンは賛歌で救い主を祝います。当然、受けた賜物に対する驚きと感謝には限りがありません。この賜物は、「あらゆる称賛にまさり、それにふさわしい賛歌はない」（続唱）のです。この賜物は、崇高で言語を絶する神秘です。私たちはこの神秘を前に、深く恍惚とした黙想の状態に驚き沈黙するしかありません。

3 「偉大な秘跡を崇め、ひれふそう。」

私たちのために死にそして復活したキリストは、ご聖体に現存しておられます。聖別されたパンとぶどう酒には、福音書に出てこられる同じキリストが私たちのところにとどまっておられるのです。弟子たちが出会い従ったキリスト、十字架にかけられ復活したキリスト、トマがその御傷に触れたキリストです。トマは御傷に触れると叫びます。「わたしの主、わたしの神よ。」（ヨハネ20・28）

祭壇上の秘跡（ご聖体）には、黙想のために差し出される「最も深いキリストの神秘」があります。みことばと御体、神の栄光と幕屋があるのです。この秘跡を前にして、神が「私たちと共に」いてくださることを確信します。イエス・キリストは、罪以外、人性のすべての側面を背負われ私たちにご自分の栄光をまとうせるため自らを無にされました。（同上21～23）

目に見えない神の御子キリストのみ顔は、単純であると同時に世の中で最も称賛される形で、御体と御血に示されます。「イエスにお目にかかりたいのです。」（ヨハネ12・21）と当惑して求めるあらゆる世代の人々に対して、教会共同体は、主がエマウスの弟子たちにされたこと、つまり「パンをさくこと」を繰り返すことで答えます。パンをさく時、真剣にキリストを求める人々の目は開かれ、心の直感によって、イエスとイエスが「この上なく」（ヨハネ13・1）愛しぬかれた誤ることのない愛をご聖体に認めます。「そしてキリストの中に、その身振りに、神の御顔を認めるのです。」

4 聖体は心を新たにし、一致と奉仕に導く

「天使の食物が与えられ... 神の御子のパンを見る。」私たちはこのパンによって強められ、熱意をもって福音を証する者となります。愛において成長するためにこのパンを必要としています。兄弟姉妹の顔にキリストの御顔を認めるには、ご聖体が必要なのです。（…）

イエスは永遠の命への旅路にいる

私たちを強めてくださる

イエスは私たちの先に立ってこの旅路を歩まれます。いけにえという極限に至るまでご自身を賜物として捧げ、食物と支えとしてご自分を私たちに差し出されました。確かにキリストは全時代の神の民の司牧者たちに絶えず繰り返しておられます。「あなたたちが彼らに食べ物を与えなさい。」（ルカ9・13）全ての人に永遠の命のパンをさくようにと言われます。これは厳しいと同時に称賛に値する仕事、世の終わりまで続く使命です。

5 「すべての人が食べて満足した。」（ルカ9・17）二千年間、中断なく続けられた祝いのこだまが、福音の言葉を通して私たちに届きます。「この世から脱出する民の祝い」この言葉は、救いの真のパンであるキリストによって強められます。（…）

キリスト者が御体と御血によって元気づけられ、人生の歩み、一致、喜ばしい信仰と優しさを通して、あらゆる人にキリストを示すことができますように。（…）（2001.6.14）

万物の神

〔水曜日の一般謁見でのお話。詩編についての要理講話第3回。〕

1 「主の造られたすべてのものよ、主を（…）あがめよ。」（ダニエル書補遺3・4）無限の大きさが、ダニエルの書の賛歌を満たします。これは、第1、第3日曜日の賛歌として唱えるよう時課の祈りが勧めるものです。このすばらしい連祷のような祈りは、主の日にふさわしく、復活したキリストの黙想を促します。主の復活は、宇宙と歴史に対する神のご計画の頂点でした。確かにキリストにおいて、アルファでありオメガ、歴史の最初の者であり最後のものであるキリストに（黙示録22・13）、創造の完全な意味があります。ヨハネが福音書の序章で記す通りです。「万物は言によって成った。」（ヨハネ1・3）救いの歴史はキリストの復活で頂点に達します。そして、人間の生命が聖霊の賜物に開かれ、私たちは神の養子となりました。同時に、神である御父に国を引き渡す神的な花婿の再来を待つのです。（1コリント15・24参照）

万物にいます神を見る

2 連祷の形をとるダニエル書補遺を読むと、あらゆるものを次々と回想するかのようです。太陽、月、星を見つめ、果てしなく広がる海、次には山、そして季節の様々な移り変わりにひたります。暑さ寒さ、光と暗闇、鉱物や植物界、動物たちのことも思い巡らします。それからこの叫びは普遍的なものとなり、神の天使に触れ、全人類にたどり着き、特に神の民イスラエル、司祭、聖人らが強調されます。これは終わらない賛歌、神、宇宙の創造主、歴史の主を賛美するため、様々な声で成るシンフォニーです。三位の神を告げるキリストの啓示の光に照らされて祈るとき、典礼に従う祈りに招かれることでしょう。「父と子と聖霊を賛美しよう。」典礼はこの祈りをダニエルの賛歌に加ええます。

3 この賛歌は、人間の宗教心を示すものとも言えま

す。人間の宗教心は、世界に見られる神のしるしを感じ取り、創造主に思いを巡らす所まで高められるものです。しかしながら、ダニエル書補遺の賛歌は、三人の若者が感謝を示すために歌われます。三人の若者、アナニア、アサリア、ミカエルは、金の像ネブカドネツアルへの崇拝を拒んだために、かまどで火刑に処せられた者たちでした。しかし奇跡的に、三人は炎から守られます。この出来事の背景と対応するのが、救いの歴史という特別な計画です。この救いの歴史の中で、神はイスラエルをご自分の民とし契約を取り交わされます。この契約は、三人の若いイスラエル人と交わされる契約と同じものです。三人は、燃えるかまどでの殉教の危機においてさえ、神に忠実であることを願いました。三人はその忠実によって、神の忠実を体験することになります。神は三人にかまどの火を近づけぬよう天使を送られました。(ダニエル2章参照)

こうして、旧約聖書における危険回避を称賛する歌に基づいて賛歌が形作られました。その他にも勝利を祝う歌で良く知られたものがあります。その一つは、出エジプトの15章に見られるものですが、それは古代ヘブライ人がエジプトの軍隊から逃れた夜、主に感謝を表わすものです。その夜、神の助けがなければ、後を追うエジプト軍に間違いなく追いつかれるはずでした。神はエジプト人に道を開かず、「馬と乗り手を海に」(出エジプト15・1)投げ込みます。

賛歌は復活した主が始める偉大な業を預言する

4 典礼上毎年復活徹夜祭で、出エジプトのイスラエル人が歌う賛歌を繰り返すことになっていますが、それは偶然ではありません。イスラエル人に開かれた道が預言的に示しているのは、キリストが死から復活した夜、人間のために開く新しい道についてです。象徴としての洗礼の水を受けることで、死から命への道を追体験することができるのです。それは、全人類のために死に打ち勝ったイエスの勝利のおかげです。日曜日の典礼の賛歌で、三人の若いイスラエル人の賛歌を繰り返すことによって、私たち

キリストの弟子は、創造やとりわけキリストの死と復活の神秘といった神の偉大な業に対して、三人と同じ感謝の心を表わします。

事実キリスト者は、賛歌で示される三人の若者の解放とイエスの復活との関係について気が付きます。イエスの復活について使徒言行録では、神を信じる者に与えられた祈りを洞察しています。詩編作者のように信頼して歌う人々が唱える祈りです。「あなたは、わたしの魂を陰府よみに捨てておかず、あなたの聖なるものを、朽ち果てるままにしておかない。」(使徒言行録2・27、詩編15・10)

伝統的に、三人の若者の賛歌とイエスの復活は関連づけられてきました。ある古代の記録には、主の日の祈りにこの賛歌が唱えられたと記されています。主の日は、キリスト者にとって週に一度の復活祭でもあります。さらに、三人の若者が炎の真只中で無傷のまま祈る姿を描いた絵画がローマのカタコンベで見つかっています。それは、祈りの効果を示すもので、神が取りなしてくださるという確信を証ししています。

5 「天の高みにおられるあなたは賛美され、世々にたたえられ栄光をお受けになりますように。」(ダニエル書補遺33) 日曜日のこの賛歌を唱えると、キリスト者は感謝を感じます。この感謝の気持ちは創造の賜物のためだけでなく、神から父としての配慮を受けることから来るものでもあります。神は、キリストを通して、私たちを子供という尊厳にまで高めてくださいました。

神の父親としての配慮によって、新しい見方で創造を眺めることができるようになります。また驚くべき美は気品あるしるしを示しています。私たちはそのしるしの中に神の愛を垣間見ることができるのです。アッシジのフランシスコはこのような心で創造を黙想し、美の源である神を称賛しました。フランシスコは、サン・ダミアノで、肉体的精神的苦しみの極みを経験しましたが、聖書の祈りが魂にこだまし「太陽の歌」を作ったのは、その後だったと考えられています。(Fonti Francescane, 263参照)

(2001.5.2)

神の恩恵

[詩編の祈りにについての要理講話。すべてのものは神の恵みであるとお話しになった。]

1 「わたしたちの父祖イスラエルの神、主よ、あなたは世々としえにほめたたえられますように。」(歴代誌上29・10) 熱のこもった称賛の賛歌は、歴代誌上巻にダビデの言葉として記されていますが、突然ほとばしる喜びを私たちの記憶によみがえらせます。最初の契約の共同体は神殿建設の準備に喜んで応じ、神殿は王や王に寛大に貢献した多くの人々の努力の実りとなりました。人々は事実、寛大に戦

いました。「人のためではなく、神なる主のため」(歴代誌上29・1) 住まいとして求められたからです。

数世紀後、歴代誌作者はこの出来事を読み直し、ダビデとその民の気持ち、つまり喜びと貢献した人々への感嘆を直感で感じ取ります。「民は彼らが自ら進んでささげたことを喜んだ。彼らが全き心をもって自ら進んで主にささげたからである。ダビデ王も大いに喜んだ。」(歴代誌上29・9)

ダビデの政治、軍事、経済の成功は神のおかげ

2 以上が、この賛歌が生まれた背景です。賛歌は、人間の満足については簡単に触れるのみで、神の栄光に直接注意を引かせることがその中心です。「主よ、あなたのものは偉大です。… 王国はあなたのものです。…」しかし神のために仕事を成す時、大きな誘惑が常に潜んでいます。神の方が私たちに負い目があるかのように自己を中心に持つてくるという誘惑です。それとは違い、ダビデは全ては神のおかげであると考えていました。知性と力で全てを行った最初の創造者は人間ではなく神ご自身なのです。

こうしてダビデは、全ては神の恵みであるという真理を表わします。神殿のためにわきへ置かれたものは、ある意味単なるお返しにすぎません。神によって作られた御父との契約というはかりしれない賜物に対する取るに足りないお返しです。このようにダビデは、軍隊や政治的経済的分野での自分の財産がすべて神のおかげだと理解していました。すべては神から来るのです。

御子は神の父性を明らかにされる

3 ここから、この節の黙想に入っていきます。賛歌の作者は神の偉大さと力を告白するために十分な言葉を持っていなかったように思えます。作者は、神がイスラエルにお示しになった特別な父性から、神をまず初めに「私たちの父」と考えます。これは最初の表題で、その後「今と永遠に」という称賛が続きます。

この祈りをキリスト教的に使うと、神の父性が神の御子の託身に完全に示されていることが思い出されます。神に愛情をもって「アッパ（父よ）」と呼びかけるのにふさわしいのは御子だけです。（マルコ14・36）しかし私たちは聖霊の賜物のおかげで、御子と御父の親子関係にあずかり、「御子における子供」になります。父である神の古代イスラエルへの祝福は、神を「私たちの父」と呼ぶというさらなる熱意をもたらしますが、それはイエスが示され教えられたことです。

4 賛歌作者の視野は、救いの歴史から全宇宙に広がり、創造主である神を黙想します。「天と地にある全てはあなたのもの」「主権はあなたのもので、全ての頭として高められます。」詩編8にあるように、賛歌を祈る者は天国の無限の広がり頭に上げ、広大な地上を驚き眺め、あらゆるものが創造主の支配下にあることを理解します。一体どうやって神の栄光を表現することができるでしょうか。神秘を追及して言葉を積み上げるように、偉大さ、強さ、栄光、権威、卓越、また力や支配力といった言葉を連ねます。人間が体験するあらゆる美しさ偉大さは、

全ての源、それを支配する方からのものと考えべきです。所有する全てのものは、神の賜物であると人間は知っています。ダビデは賛歌の中でさらに強調します。「このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。」（歴代誌上29・14）

いただいたものを神に返すという霊性

5 神の賜物であるという事実の背景によって、私たちは称賛と感謝という賛歌の断片を「奉獻」という確かな精神と結びつけることができます。奉獻の精神は、キリスト教の典礼が、特に聖体の祝いにおいて私たちを生かすものです。それは、司祭がパンとぶどう酒をキリストの御体と御血に変える時に唱える二つの祈りに現れます。「あなたの善を通して、私たちはこのパンを受けました。このパンは地上と人間の仕事の実りです。私たちはこれが永遠の命のパンとなるようあなたに示します。」（奉納の祈りを自由に訳したもの）この祈りはぶどう酒に対しても繰り返されます。また同じような箇所がビザンチンの神聖な典礼や古代のローマ奉獻文にも見られます。両者とも、聖体の記念唱の中で、神の賜物として受けた物を差し出す意向を表わすために用いています。

6 最後に、神についてのこのような見方は、人間が体験する豊かさや力を眺める賛歌に当てはめられません。豊かさや力の側面は、ダビデが神殿建設のために必要なものを準備する間に現れます。誰にでも起こる誘惑はダビデにとっても誘惑であったかもしれませんが、自分が所有するものの絶対的な支配者であるかのように振る舞ったり、所有物をプライドの源にしたり他者への虐待に用いたりすることなどです。賛歌に示される祈りは、全てを神から与えられる「貧しい者」として人間の立場を表わします。

復活した主、宇宙の王、王位の源

地上の王は、神の王位を映し出す者にすぎません。「主よ、王国はあなたのものです。」富む者は、自分が所有する良い物の源を忘れることはできません。「富や名誉はあなたからのものです。」権力者は「あらゆる偉大さと力」の源である神をどのように認識するか知るべきです。キリスト者はこの表現を祈りで用い、復活した主についての喜びを黙想するよう求められています。復活した主は、神によって「すべての支配、権威、勢力、主権の上に」（エフェソ1・21）置かれ、栄光を受けました。キリストこそ宇宙の真の王なのです。

(2001.6.6)

シリアの キリスト教の歴史

〔教皇様が5月に訪問なさったシリアの歴史について〕

年表

34年

ダマスコへ向かうタルソスのパウロ（パウロ）の回心。その頃、シリアではすでにイエスの名は知られていた。

46～48年

パウロがアンティオキアへの初めての宣教旅行を行う。この町で初めてイエスの弟子がキリスト教徒と呼ばれた。

1世紀の終わり

キリスト教がエデッサ（今日のウルファとトルコ）まで広まる。

110年頃～

聖イグナチオがアンティオキアの司教に就任。殉教者の時代が始まる。

2～4世紀

神学の学校がアンティオキアで発展。最も著名な弟子の一人がヨハネ・クリゾストモ。4～5世紀に多くの修道院制が広まり、柱頭隠者の聖シメオンや聖マロンはアレppoの近くに住んでいた。

4世紀

エデッサは、シリア・アラマイ神学学校の場となる。聖エフREMやバルデサネ、アフラータがシリア内陸部にキリスト教を広める。

4～6世紀

キリスト教徒が他の場所にも広がって行く。

5世紀

シリアはキリスト単性論争の中心地となる。司教座をめぐるキリスト単性論とカトリックとの間で争いが起こっていた。カルケドン公会議は論争を終結させられず、ローマに忠誠を示す聖マロンの修道士らはレバノンに逃れる。

7世紀

ダマスクスのウマイヤ王朝には、多数のキリスト教徒がいたが、オマール王の時代にキリスト教徒の役人は解雇される。次の国王は、キリスト教徒を識別するための衣服を強制的に指定する。722年当時シリアの人口は400万でキリスト教徒の数は380万だった。

8世紀

アッバス王朝のアルマーディ王はアラビアのキリスト教徒タヌクスをイスラム教に改宗させる。

9世紀

イスラムが優位に立つ。多くの教会はモスクとなり、900年頃にはシリアの人口の半分がイスラム教徒になった。

12～13世紀

支配者が十字軍とイスラム教徒の間で交代する中で、シリアのキリスト教徒は困難な状況に陥る。

1124年

アレppoのカテドラルがモスクに変わる。

1350年

100万の人口の内、キリスト教徒は10万。

1439年

（キリスト単性論の）ヤコブ派がフローレンスの公会議に参加するが、コンスタンティノープルの陥落やオスマン・トルコのシリア占領によって教会再統一は妨げられる。

16世紀

オスマン・トルコは、ギリシア正教会、ヤコブ派、アルメニアキリスト教会に自治権を認める。

19世紀

オスマン・トルコはヨーロッパの圧力により、宗教を問わず市民は平等の権利を有し、キリスト教徒の個人的な地位が守られるという宣言を行う。

1860年

レバノン山でのキリスト教徒虐殺がダマスクスまで広がる。生存者は1万2千人。

1915年

トルコの虐殺を逃れたアルメニア人が大量にシリアに流れ込む。

訳注

1. キリスト単性論：キリストは神性と人性とが一体化したものであるという論

今日のシリアのキリスト教徒

ギリシア正教会

6つの教区から成り50万人を有す。最高責任者は「アンティオキアと全東方教会の総主教」。典礼はアラビア語でダマスクスは1342年より総主教区。

ギリシアカトリック（メルカイト）

アンティオキアのギリシアカトリック教会は、アンティオキアでのギリシア正教会の一部がカトリックへの復帰を目指して生まれた。1724年、総主教にキリル・タナスが選出された。キリル・タナスはローマとの統一を望んだために、コンスタンティノープルを悩ませるが、コンスタンティノープルはダマスクスに他の総主教を置き、メルカイトを分割させる。タナスと数人のメルカイトたちはレバノンへの避難を余儀なくされ、パレスティナやエジプトに移民する者もあった。アンティオキアに留まった者は、1817年アレppoでオスマンから激しい迫害を受け殺害される。ギリシアに革命が起こり、正教会への敵意が薄れた。1837年メルカイトのための責任者が選出される。現在メルカイトは5つの教区からな

り、20万人を有している。

アルメニア

アルメニア教会は、3世紀にアルメニアをキリスト教化した教化者聖グレゴリオが始めた。アルメニア教会は正教会とアルメニア・カトリックとに分かれている。第一次世界大戦中のトルコによる強制追放命令、キリキアとアレクサンドレッタからの脱出によりアルメニア教会はシリアに広がる。シスのアルメニア・グレゴリアンの総主教とキリキアのアルメニア・カトリック総大司教はレバノンに住む。今日、15万のアルメニア・シリア・グレゴリアン教徒と2万のカトリックが主にアレppo、ジャジラ、ラッタキアに住む。アルメニア・カトリックの教区は2つで典礼はエルサレム、カッパドキア、ビザンチンの伝統に基づく。

シリア

シリア教会は、6世紀の半ば、キリストの人性と神性を巡る論争から生まれた。ヤコブ・バラダイはキリスト単性論者の司祭と司教を叙階させ、独自の位階制度を確立する。ビザンチンの規則に反対するほとんどのシリア人がシリア教会に加わる。1662年、前ヤコブ派の司教がシリア・カトリック教会の最初の総大司教となる。しかしながら、その期間は短く、シリア教会は1783年にマロナイト総大司教の保護のもとで再建される。総大司教は1845年に公的認可が下りるまでシリア教会をレバノンに逃れさせる。シリア教会に属する者の多くは南トルコからの難民である。6万のヤコブ派と4万のカトリックが主にジャジラとアレppoに住んでいる。

アッシリアとカルデア

アッシリア派はネストリウス派に属するキリスト教で、メソポタミアで起こった。カルデア派は1381年にカトリックに戻った人々である。シリアに住む4万のアッシリア派とカルデア派は少数派で、戦争や亡命者の後が断たない。カルデア派の教区は一つで、アレppoにあり、バビロンの称号を持つカルデア派総大司教は、バグダッドに住んでいる。典礼はカルデア語とアラビア語。

マロナイト

聖マロンの修道士らがアンティオキアのオロンテス川沿いに教会を建てる。マロナイトはカトリックである。単性論者やアラビア人に迫害され、多くはレバノンに逃れる。現在シリアには2万5千のマロナイトが住み、3つの教区を有しアレppo、タルトゥス、ラッタキア、ダマスカスに住む。

ローマ・カトリック

3千のローマ・カトリックがダマスカスやアレppoに住む。大部分はパレスティナやフランス、イタリアからのカトリックで、1762年ローマ・カトリック

のために作られたアレppoのローマ使徒座代理区のもとで暮らしている。

プロテスタント

様々な宗派に属する2～3千人のプロテスタントが住む。

国との関係

シリアの国教はイスラム教ではない。シリアに国教はなく、他宗教の権利を保証している。キリスト教徒は土地を買い教会を建てることができる。聖職者は兵役を免除され、学校はキリスト教とイスラム教の宗教指導をする。他のアラブ諸国と異なり、シリアはイスラム原理主義を抑えている。キリスト教は生活を保証する政府を支持する。キリスト教教会にとって移民は大きな問題で、1958年以来、少なくとも25万のキリスト教徒がシリアを離れている。地方教会は、イスラム教の圧力と不十分な組織という問題から都市に移っている。

シリアの他の諸宗教

イスラム教

シリアの主要都市に住むイスラム教スンナ派は人口の75パーセントを占め約1200万人である。マホメットの打ち立てた慣行・規範を守り、後継者のカリフ（終身制）に従う。アラウィー派は現在180万でマホメットの義理の息子アリーに従う。イスラム神学からは異端とみなされている。十字軍との接触によって宗教的融合が見られ、降誕祭、主の公現、聖霊降臨を祝う。イスマイル派は20万の信者を有すし、イマームの主権後継を7番目のイマームまで認める。12番目までの主権後継を認めるイマーム派はイランの国教である。

ドルーズ

ドルーズ派の教えはまずエジプトで広まる。その神秘的な信仰はアリストテレスや詩編といった様々な書物で成り立つ。輪廻を信じ一夫多妻を禁止する。他のイスラム教からは異端と見なされる。迫害のため、南シリアやレバノンの山地に逃れた。

ユダヤ教

シリアにおける宗教の中で2500年の歴史を自負する。イスラエル国家の建設によってシリア国内の数は減少する。1994年には1250人しか残っておらず、その多くはアレppoに住む。国外に出ることは政府によって規制されていたが、ごく最近になってようやく規制が解かれシリアのユダヤ人は移住が許されるようになった。ただし、イスラエルではなく、多くのシリアユダヤ人は北アメリカへ移住している。

（「オッセルバトーレロマーノ」より）